

海の儀

狂悠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

瑞鶴と初月はどのような関係なんだろうね。  
私なりの関係を二人の間に作りました。

拙作『Silent stream』『Call you \*\*\*  
?』『Call me \*\*\*!』と世界線が繋がっています。世界  
観ではありません、世界線です。

目次

生き残りの議	1
死に損ないの義	6

## 生き残りの議

瑞鶴が弓を引く。いわゆる弓道っていうのは、こんなに緊張感があるのか。息を止めた瑞鶴の後ろ姿が三秒だけ静止して、矢が放たれる。放たれた矢は直線に近い放物線を描いて的の第四象限に命中する。

弓道の作法なんて分からない僕でも、いい加減だと分かる所作で弓を右手に持ち替える。小さく首を傾げる。

僕は手を叩く。瑞鶴は驚いてこちらを向いた。

「初月、いたの」

「さすが一航戦、上手だ」

「その呼び方はちよつと。ここでは私は五航戦だから」

「五航戦？ 聞いたことないぞ」

「そうかもね」

もう一本矢を取ってつがえる。

もう一度弓を引く。さつきと同じように見えるけれど、何か違うんだらう。

また放たれた矢は糸を引くように的のど真ん中に当たった。

「修正したのか？」

「そう」

「毎日やってるのか？」

「もちろん。リハビリも兼ねてね」

「リハビリ？ 何かあったのか？」

「あれ？ 知らなかったっけ。一回左腕が取れたの」

「え？」

「左腕は繋がったけどまだ完全じゃないから」

「こつちを見ないでまた弓を引く。」

そんな話があったのか。

「それとね、左目もないから」

「どういふことだ？ 何を言っている？ 左目だつて？」

また矢が放たれる。一本前に刺さった矢に当たってまた別の放物

線を描いた。

「後で見せたげる」

瑞鶴はこちらを見ない。

また弓を引く。

それより。

「……三航戦でもないのか？」

「っー」

息を止めていた瑞鶴から声が漏れる。それと同時に放たれた矢は的の縁ギリギリに刺さる。

苦笑いの瑞鶴が振り向く。

「やめてよ。思い出したくないから」

「どうして？ あの時の瑞鶴は勇壮でカッコよかつたぞ」

「勇壮？ あんな惨めな姿が？」

語気が強い。

笑みも消えている。

左目？ 何も変わってないじゃないか。

「先輩達も、翔鶴姉も、……大鳳も沈んで、私と、瑞鳳だけ残って？」

ロクな艦載機も残ってなくて？ 質量も負けてて、囿になって沈ん

だ、その何が勇壮よ！ 初月もあの時沈んだんでしょ？ 辛く、

……辛くないの？」

「僕は辛くない。あの時僕は皆を守って沈んだから」

「皮肉ー」

瑞鶴は弓を投げ捨てる。木の床に音を立てて落ちる。

「守るものなんて私にはもう残ってなかった！ 皮肉じゃないの！」

「そう聞こえたかい？」

「どうして私をそんなに怒らせるの？」

右手の革の手袋を落とす。

「声が震えてるじゃないか」

「何よ、それが何なのよ」

「泣いてるのか？」

「知らないわよ」

ちゃんと左目にも涙が滲んでいる。左目がどうなっているんだ？  
瑞鶴は口をぱくぱくさせる。音は出てこない。肩で息をしている。  
ゆっくり歩み寄る。

瑞鶴がタバコを取り出して、ジッポで火をつける。僕の存在を忘れようとしているのか？ 手が震えているぞ。忘れられるのか？

「僕はここにいてるぞ？」

煙を吸い込んでから瑞鶴が口を開く。

「そう」

生返事だ。瑞鶴が二歩後ずさって、尻餅をついた。

「どうした？」

なんて顔だ。僕を怖がってるみたいじゃないか。

僕は膝について、後ずさりする瑞鶴の脚を掴む。瑞鶴が小さく悲鳴を上げる。瑞鶴の口を左手で塞ぐ。

「逃げることはないじゃないか」

「離してえ」

僕が押し倒したみたいだ。あの瑞鶴が、僕の手のひらの上だ。

「泣いてるじゃないか」

「やめてよお……」

消え入りそうな、くぐもった声で訴える。

「ちよつと我慢してくれ」

瑞鶴の右目を塞ぐ。

瞬きもする、涙も流す、ひっきりなしに動く左の目。

「左目は開けてほしいんだけどな」

嗚咽が聞こえる。ゾクゾクする。

「瑞鶴、僕がどんな顔してるか分かるかい？ 教えてくれよ」

「見えない、見えないよ。なんにも見えない……」

うわ言みたいに言う。

「そうか、見えないか、残念だな」

「初月……やめてえ」

「やめないよ」

舌舐めずりをする。

美しい義眼を、左目を舐めた。生体ではない硬い、冷たい感触とほとんど味のしない涙が舌を刺激する。

「ごめんな、辛かったよな」

瑞鶴と目を合わせる。見えていない左目と。

瑞鶴が声を上げて泣く。

床に落ちていたタバコを口に啣える。

「どうやるんだろうな」

弓を拾う。矢も一本手にとる。

作法も、握りも知らない。

「こんなに重いのか」

歯を食いしばって息を止める。

こんなにキツイのか！

張力に耐えられず放たれた矢が右に曲がって、的のずっと手前の地面に刺さった。

弓を床に置く。

瑞鶴は横たわったまま小さな子供みたいに声を上げて泣いている。

「瑞鶴、起きた方がいい」

立ったまま瑞鶴を見下ろす。

「出てっつてよ……一人にして」

弱々しい声。

「いいのか？」

「早くして」

「そうか」

ドアを開ける。湿ったぬるい風が緩やかに弓道場の空気を混ぜる。

短くなったタバコをコンクリートの地面に捨てる。吸い殻を踏み潰してドアの中に振り返る。瑞鶴は僕に背中を向けて胡座をかいている。肩が落ちて、頭を垂れている。身じろぎひとつせずに床を見ている。

「悪かったね」

それだけ言っ僕は弓道場を離れた。

矢が的に当たる音が聞こえた。

## 死に損ないの義

海を見ながらタバコの煙を吸う。堤防に腰掛ける。

たぶんあの子が来る。この間のお詫びをしてくれるだろう。今の私にはそんなものは必要ないけど。

仕返ししなきゃいけない。

タバコのヤニで真っ黒になったガムを海に吐き捨てる。

「瑞鶴、隣いいか？」

私は答えない。

「勝手に座るぞ」

初月が私の左に座る。

「瑞鶴、火貸してくれるか？」

ジツポに火をつけて初月に突き出す。

「ん、ありがとう」

私は何も喋らない。

短くなったタバコを海に投げ捨てる。小さな音と湯気を立てて火が消えた。新しいタバコに火をつけて口に咥える。

なんか言っつてよ。

ため息をつけてその意思を伝えた。

「瑞鶴、この間は、その……」

なんでそこで詰まるの？

私は何も言わない。抗議してるつもりだ。

「この間は悪かった。謝るよ」

初月を見る。

初月は私を見ていない。自分の手なのか、そこに握られてるタバコなのか、その先の海面なのか、分からないけど、伏目で私を見ない。

「こっち見て」

初月の横顔が厳しくなる。

おずおずと、初月が私を見る。

「謝ってくれなくていいの」

「僕が謝りたいんだ」

「そう」

顔をこちらに向けた初月は、それでも私と目を合わせない。

「こっち見てよ」

明らかに初月は、ビビっている。

「謝るから、ごめん、ごめん。だから、その」

泣きそうな声でまくし立てる。

「怒ってないから、こっち見てよ」

「本当？」

「ええ」

初めて初月と目が合う。

その瞳孔が私を捉えた時に沸き起こった感情を私は表現できない。胃の痛みとそこから逆流してくる酸とため息をつきたくなるような闇への憧憬と義眼と今にも立ち消えそうな後頭部から渦巻く熱が頭蓋骨と脳の間を伝って眉間まで流れ着いて鼻筋から抜けていく過程とが脂質の膜に包まれて血中を循環する快楽ではない。口の中を蹂躪するアルカリみたいな苦味とバッドトリップの間目の奥に微かに灯る劣情と全身の筋肉の痙攣とを気管から細く短く解放すると言った方が近い。

その感情を一旦左目の裏にしまいこんで言葉を繋いだ。

「あれからね、思い出してみたの。あの海でのこと」

初月は何も言わない。また私から目を逸らしている。

前に向き直る。タバコの灰を海に落とす。

「あそこまで生き残っていた艦はみんな幸運艦よ」

初月がタバコを噛み潰す。

「敵のどうしようもないくらい空襲は誰だって一回は経験してるわ。初月もそうでしょ？ それでもあの海でみんな沈んでいった。ずっと私と戦ってきた仲間が？ 沈んじやった。私は艦載機まで取り上げられちゃった。でもあの時の私は小沢っちの艦だったから、あの人の言ったことだから。オトリだったから。私が、私は、なんにもできなくなつて、爆弾も魚雷も食らつて、機関がやられちゃつて、分かる？ 機関がやられて動きたくても動けない。どんなに頑張つて

も22ノットしか出ないの。浸水しちゃって、どんどん傾いてく。小沢っちも大淀に任せて、なんにもなくなっちゃった。でもね、乗員のみんなが私の甲板で万歳三唱してくれた。傾いた飛行甲板で、みんなが集まって万歳、って。でも瑞鶴は沈んだ」

「その乗員を僕が救助したんだ」

私は泣いていた。思い出したくないのに、思い出した。辛いのに、嬉しかった。辛さと嬉しさとさっきの感情がない交ぜになって、堪らなくなった。

「うん、そう、そう、でも初月は殿になって沈んだ。内火艇で何人か助かったんでしょ？ だから初月が内火艇を気にするのよね。思い出したの。あの海」

「僕はみんなを守ったけれど、瑞鶴を守れなかった」

「それが皮肉なのよ。あの時の瑞鶴に何を守れっていうのよ」

「勇壮さではなかった。でも悲壮な姿だったよ」

「悲しかったら意味はないのよ」

涙が止まらない。

「瑞鶴、泣くな」

海水でタバコの火が消える音が聞こえた。

「そんなこと言われるなんてね」

涙が止まらない。

「謝んなくていいって言ったよね」

「うん」

「仕返しするから」

「……そうか」

初月がため息をつく。

「翔鶴型に仕打ちを受けるなんてな。僕の体が持つかな」

冗談っぽく言う。

初月を見る。初月は私を見ない。

私は口を開きかけたが、やめた。何を言うか分からなかったから。

タバコを海に捨てる。

仕返しってなんだ？

初月は私を見ない。

左目の裏の感情が全身に浸透する。拡散していく透明に近い純粋な流れが痙攣として背筋を反らせる。

「……初月」

「どうした？」

私はどうすればいい？

周りに誰もいない。白波が足元に打ちつける音が高周波のノコギリ波になって頭蓋骨の薄い部分を削ろうとする。

「ごめんね」

「謝らなくていい。僕が瑞鶴の役に立てればいい」

「私が謝りたいの。骨ぐらひは拾ってあげる」

「瑞鶴、泣いてるんだな」

何が私の脳の中でリフレインしているんだ？

初月を見る。

初月は私を見ない。

俯いた横顔は決して私を見ない。

左目の感情と心臓のあたりを引っ掻き回す熱が周りの組織を破壊する。気がする。

加虐性愛より高尚な、それでも慈愛より低俗な初月への感情が首をもたげて左目の感情を懐柔する。

ワケの分からなくなった私の右手が初月の細い首にかかって少しだけ力を加えた。

初月の顔が強張った気がする。

押し倒す。

何がリフレインしている？

右手は首にかかったままだ。馬乗りになって正面で向き合っても初月は私を見てくれない。

「こっち見てよ」

「どうとでもしてくれ」

「見てって言ってるの」

「瑞鶴、怖いぞ」

「見て、私を見て」

強い視線が私の右の網膜を貫く。揺るぎないのに怖がったみたいな視線。この子は戦場でもこんな目だ。私は敵か？

「怖い。そんな顔するな」

震えている。怖いのか？

初月の顔に透明の液体がかかる。

左手も初月の首に。

「瑞鶴！」

呼吸が浅くなる。

涎が垂れる。初月を濡らした液体は私から出た水だ。

親指に力を入れた。当然のように。儀式のように。

彼女が私の腕を掴む。カエルを潰したみたいな音が彼女の喉から発生してそれからその喉から音が消えた。

彼女の脚が暴れる。痛いほどに彼女の手が私の腕を締め上げる。

彼女の涙と私の涙と涎が彼女の顔を濡らす。

彼女の口が動く。ず、い、か、く、や、め、て。そう動いた気がする。その瞬間、両手に体重をかける。瑞鶴？ やめて？

右目だけの視界が何度もピントをずらす。

彼女の目が見開かれる。白に浮き出る血管の赤を美しいと思った。

酸素を求める。呼吸させてもらえない彼女と呼吸ができない私。

腕を握る力が弱くなる。そのとき私の顔が歪んでいることを認識した。口は開かれたまま、顔にシワが刻まれる。

ドラッグより浅い、皮膚を焦がすような愉悦。

hの音が口から漏れだす。

彼女から手を離れた。殺したらまずいとか、そんな下等な理由じゃない。私が知っているどんな物質を静脈に流し込んでも得られない熱的な揺らぎを孕んだ快楽に私は苛まれている。熱に浮かされて力が抜けただけかもしれない。

涙は止まらない。

唾液を飲み込む。

何がリフレインだ！

私の脳の中では何もリフレインなんかしていない。乱雑な快感と熱の混合物が細胞の間をすり抜けてそしてそれが周期を持つことはない。

膝が伸びようとするのに逆らえない。私は立ち上がって歩き出した。

笑い声が木霊する。私以外の誰にも聞こえない笑い声。

歩く。どこに向かうかなんて関係ない。どこでもいい。私が歩いたところが道であり、目的地だ。

涼しい風が吹く。表皮の熱を剥ぎ取っていく風が別れを演出するのか？

再現できない感情が涼しい風と同時に消える。消えてしまった感情は熱的な量でなく私の中かそれ以外の場所を源とする縦波で、頭蓋骨ごと脳を揺らす。

再現できない感情は忘れられる。ひどい、ひどいことだ。

忘れられたから再現できない。左目の感情は空間に滲み出して戻ってくることはない。

何も解決しない。解決しない！

コンクリートを歩く。コンクリートは何も飲み込まない。地面からの反作用が私の中身を掻き混ぜていつか私は脂質の膜に包まれた有機化合物と水の混合物になる。

右手に残った私以外の熱はより温度の低い空気に消えて再現できない。

幾つもの感情に支配された私はそれでも純粹だった。もう再現できない。

私は見られている。違う。私を見ている人がいる。視界に入ったからとか、注意を向けたとか、そんな生易しいものじゃない。見るなんてことはそんなことじゃない。そんなことだったら私はそいつに中指を立てて唾を吐きかけて笑ってやってそのままどこかに隠れている。そいつはただ眺めている。ただ視界に捉えているだけだ。でも今私を見ている人はそれを許さない。そいつに向くことも、中指を立てることも、唾を吐くことも、隠れることも。そいつはただ無言で

私を許さない。見るというのは許さないことだ。私は今何も見えない。目を開いて、何もだ。私が今一人歩く眼前に見るものはない。視界を彩るだけのものは決して許しを請わない。許しを請わないものを私は許すしかない。

許しなんて知らない私が何を許すんだ？

何も見えない。見てない。

許して。

私は笑っている。

こみ上げてくる呼吸に抗えず笑ったみたいな音が喉から出ている。

何にも抵抗できない。

どうしてこんなことになっちゃったんだろ。

唾を飲み込む。

何にキズがついた？ キズがないんじや私はこんなことにはならない。

表現できない感情は消え失せた。私を支配するのは脳を掻き回される錯覚だけだ。

それでも、それでも瑞鶴はフィリピンの海より自由だった。